時評

自然と人と身体感覚

小林賢太

歌と自然は関係が深い。万葉の昔から自然は詠歌の対象であったし、『古今集』仮名序の冒頭「やまとうたは人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」は、歌の本質を植物に例えて評する。

和歌の修辞技法の一つである序詞には、人の心情を自然の景に託す例が多い。平安後期の歌人・源俊頼の歌を例に見てみよう。

・風吹けば空にたなびく浮雲のゆくへも知らぬ恋もするかな
・秋の野のもとあらの萩に置く露のゆくへも知らぬ恋もするかな

（散木奇歌集・一二三三・一二三七）

両首とも上の句が序詞、下の句で行方の分からない恋心を詠う。同じ恋心を詠んでいても、序詞が表す景（雄大な空にたゆたう浮雲／まばらな萩の上の小さな露）によって印象が異なる。自然の景は人の心の細やかな違いを絶妙に表現し得るだろう。恋心を自然に例える歌は、現代短歌にも見出せる。例えば次の一首。

・萩ほろほろ薄紅（うすくれなゐ）のちりわかれ恋は畢竟（ひきやう）はがれゆく箔

（松平盟子『シュガー』）

上の句はまるで序詞のようである。だが結句で再び箔という喩に戻る複雑さは、現代短歌ならではだろう。また既に多くの指摘があるが、景と情とを巧みに取り合わせる歌人に吉川宏志がいる。

・風を浴びきりきり舞いの曼珠沙華　抱きたさはときに逢いたさを越ゆ

（『青蟬』）

・つらいんじゃなく眠いだけ遠山は炬燵の色に夕べ染まりつ
・隠すのは秘めることより苦いかな銀杏の樹皮をぬらしゆく雨

そんな吉川の自然と人に関する論考が、角川「短歌」二〇二三年五月号に掲載された。「シリーズ特集　対比に見る短歌の構造学」のテーマは「自然vs.人」だった。吉川の総論「観察から比喩へ」は、長塚節から現代短歌までを縦横に論じる。吉川は、客観的な観察のみでは自然と自己が切り離されてしまうが、逆に自然と自己の一体化が過ぎると個を失う可能性があると述べる。そこで現代短歌が探求してきたのは、「身体感覚によって自己と自然を繋ぐ表現」ではないかと指摘する。例として引かれた一首。

・夕暮れに雲が葡萄のようだった握りつぶせば台風がくる

（田村穂隆『湖とファルセット』）

観察だけにとどまらず、握りつぶすという身体感覚を用いて自然を詠う。たしかに、肉体的感覚をもって自然を詠む例は、古典には珍しいかもしれない。当てはまりそうなのは次の歌だろうか。

・須磨の海人（あま）の袖に吹きこす潮風のなるとはすれど手にもたまらず

（新古今和歌集・恋二・一一一七・藤原定家）

「海辺恋（かへんのこい）」という題の恋歌である。袖を吹き抜ける潮風は手中に留めておけない。同様に、恋しいあの人も自分のものにはならないのだなぁと詠う。「手にもたまらず」という身体感覚的表現は、「握りつぶせば」と詠う田村の歌にも通底しそうだ。

現在、AIやVR技術の進歩は著しい。そうした現代において、肉体的・身体的な感覚に基づく豊穣な言語表現は、現実世界を生きる生身の人間ならではの強みかもしれない。